

〔研究論文〕

J. - J.ルソーの経済観と「社会的経済（協同経済）」（*Économie Sociale*）

荒井 宏祐

〔Article〕

## A Study of J.-J. Rousseau's Economic Reflections from the Viewpoint of "Économie Sociale"

Hirosuke ARAI

## Abstract

The aim of this paper is to discuss a new viewpoint of J.-J. Rousseau's economic work in regards to current 'Économie Sociale' (Cooperative Economy) studies which are producing a new branch of modern economics research in our time. I will compare Rousseau's works with articles of "Économie Sociale" by pointing out three aspects as follows.

1. I have an attempt to find characteristics of Rousseau's economic reflections in "Discours sur l'économie politique", "La Nouvelle Héloïse", "Émile", "Projet de Constitution pour la Corse", "Rêveries du promeur Solitaire" etc.

2. Second, I try to discover features of "Économie Sociale" 's research.

3. Third, I examine and compare characteristics with features mentioned above.

After a discussion of these works, I conclude that Rousseau's economics intends to work for common benefit or non - profit economy, not for private interest or profit economy, and that "Économie Sociale" 's ideology and Rousseau's economics have similarities, which may create a new position for Rousseau's economic work in the present age.

## はじめに

J. - J.ルソー (Jean - Jacques Rousseau 1712-1778) の経済思想については、既に内外の研究者によって検討が進められている<sup>(1)</sup>。

## 〔A〕脚注

(1) ルソーの経済思想研究の例として、次が見られる。

ア 羽鳥卓也「ルソー経済理論の構成」内田義彦『古典経済学研究』上巻未来社1957年

イ 内田義彦『社会認識の歩み』第Ⅱ部第3章「歴史の発掘 —スミスとルソー—」岩波書店1971年

ウ 木崎喜代治「ルソーとスミス—人間像折出への一つの試み—」『季刊社会思想』第3巻第1号神奈川大学1973年

エ 武長脩行「ルソーとスミス—功利と正義をめぐるの社会感情論—」『杉野女子大学紀要』17杉野女子大学短期大学部1980年

オ 飯岡秀夫『ルソーの「経済論」—「本然」と「逸脱」—』高文堂出版社2003年

カ Bertil Fridén *Rousseau Economic Philosophy Beyond the Market of Innocents* Kluwer Academic publishers 1998

B. フレーデン〔著〕鈴木信雄 八幡清文 藤有史〔訳〕『ルソーの経済哲学』日本経済評論社2003年

本稿では現代における新しい経済思潮、活動の一つとして注目されている、「社会的経済ないし協同経済」（Economie Sociale）研究における主張とルソーの作品に見られる経済観との関連などについて吟味を試み、彼の経済哲学、経済思想研究に、現代的な立場からの新視点を示唆しうるかどうか考察を加えることを目的としている。

ルソーの経済思想は、『政治経済論』、「コルシカ憲法草案」、「ポーランド統治論」、『エミール』、『告白』、『新エロイズ』などにあらわれていると考えられよう。以下では、主として『新エロイズ』において農場主のヴォルマルとその妻ジュリが営む農場「クララン」における農場経営に示される、ルソーの経済的世界の特徴について見ることにする。最初に、その具体的な姿をルソー自らの言説のうちにとらえ、次にそこにあらわれた自然観を検討したあと、これらと「社会的経済または協同経済」（Economie Sociale）の主張との関連などを考えてみたい。

なお、これまで筆者は、ルソーにおける自然界の認識や描写の諸相を吟味するとともに、これらと社会、政治、教育、宗教などの認識、あるいは彼の文学作品や老年期の自己意識などとの関連を検討してきた<sup>(2)</sup>。本稿はこうした検討の一環を成すものである。

以下、文注は、脚注で〔A〕の分類記号のもとに番号を（ ）で、文献引用は、〔B〕の分類記号のもとで、本文末にあるような文献番号一頁数で示し、邦訳がある場合は、原書一頁数、訳書（原書の文献番号と同じ）一頁数の順で記す。文注には文献引用を含んだり、引用文献一覧に注を施すことがある。

## 1 クラランの経済的世界の特徴

クラランにおけるヴォルマルとジュリの生活には経済的な活動以外の事柄も多く描かれているが、ここでは経済、経営活動に限ってその主な特徴を整理してみると、次のようになる。

### （1）自営・耕作労働に基づく自給自足志向の非貨幣交換経済

クララン農場経営の第1の特徴は、まず以下に見るように「自営・耕作労働」、「自給自足」、「非貨幣交換」などと考えられる。

#### ア 自営・耕作労働

ヴォルマルとジュリの財産は「世人の富の観点からすれば中くらいの財産（un bien médiocre）（1-529、1-218）だが、その「土地は貸しつけられているのではなくて、ご自身の配慮によって耕されているのでして、この耕作がご夫妻の仕事、財産、快樂の大部分となっている」（1-442、1-85）。また「その産物は葡萄で、これが大きな対象になっている」（1-442、1-85）。そして2人は「主義として、耕作から最大限の生産をあげるようにしておられますが、それは一そう大きな利益（grand gain）を

(2) 荒井宏祐「J・Jルソーにおける自然界の認識—考察序説—」『文教大学国際学部紀要』第10巻第2号（2000年2月）、同「J・Jルソーにおける自然空間の諸相と「化学論」に見る生態学的認識—研究序説—」同紀第10巻第1号（1999年10月）、同「『孤独な散歩者の夢想』（J・Jルソー）における老年期の課題と風景の世界—考察序説—」同紀要第11巻第1号（2000年7月）など。

他に、「J・Jルソーにおける「自然」・「社会」・「環境」認識と「環境教育」をめぐる考察序説」『文教大学国際学部紀要』第8巻（1998年3月）、同「J・Jルソーにおける自然環境の認識と社会的ジレンマ問題—考察序説—」同紀要第9巻第1号（1998年10月）、同「I. ニュートンとJ・Jルソー —18世紀ヨーロッパにおける自然と神—」同紀要第15巻第1号（2004年7月）、同「J・Jルソーにおけるネイチャーライティング（環境文学）」同紀要第17巻第2号（2007年1月）など

得るためではなく、一そう多くの人を養うため」(1-442、1-85)である。ヴォルマールの考え方は、「土地は耕作する腕の数に比例して生産するもの」で、「土地は一そう好く耕されればますます多くの収穫をもたらし、この過剰生産 (surabundance) は土地をより良く耕す手段を与え、土地に人と家畜を入れれば入れるほど、土地は彼らを養う余剰をますます供給する」。この「生産物と耕作者との…不断の相互的な増加は何処まで行ったら停止し得るか分かりません」(以上、1-442~443、1-85~86)ということである。

上記のように、私有地を他人に貸しつけてそこから不労所得を得るのではなく、自らの土地の耕作労働によって生活するというヴォルマールの考え方は、ルソーの「耕作者には、その耕した土地の産物に対する権利を与え、従って、地所に対する権利を…与えるものは、ただ労働だけである」(2-173、2-99)という『人間不平等起原論』(以下『不平等論』)の主張や、「所有の唯一のしるし」は「労働と耕作によってこれを占有すること」(3-116、3-38)であるという『社会契約論』の主張のいわば実践例を示しているものとも思われる。『新エロイズ』の別の箇所でも、「人間にとって自然な状態は、土地を耕し、その産物によって生活すること」(1-534、1-226)であると述べられている。これらは自営・耕作労働に対してルソーが特別の地位を与えていることを示唆するものであろう。

この耕作労働には多くの「日傭労働者」がやとわれるが、これらの人々には「この国の相場になっている報酬」のほかに「働きぶりに満足を感じる程度に応じてのみ支払う」、いわば出来高払いの、「もう少し多額で賞与的な報酬」とさらに週間当りで「最も勤勉だった」(1-442、1-86)者には賞与(20パーツ<sup>(3)</sup>)が支払われる。これらの結果、日傭労働者にはかなりの高報酬が支払われるが、出来高払いの報酬と賞与という「慎重に公正に用いられる競争手段は知らず知らずのうちにあらゆる者を勤勉に、熱心にし、結局、そのためにかかる費用以上の収益をもたらす」(1-443、1-87)とされている。これが土地を他人に貸しつけず日傭労働者の雇用による自営・耕作を行う理由となっている。ヴォルマールは請作(小作)に出した方が「労働は一そう金がかからずに行われ、収穫は一そう注意深く行われる」(1-549、1-246)だろうという質問に対し、次のように答えている。

「それは間違いです。…百姓という者は収穫 (produit) を増すことを念ずるよりもむしろ費用を節約することを念ずるものです。と言うのは、百姓にとっては利益 (profits) が有利である以上に前払い (avances) が辛いのですから。百姓の目的は土地を改良することよりはむしろ土地に殆ど費用をかけないことにあるのですから。百姓が現在の儲け (un gain) を確保するには、土地を改良するどころか、むしろ土地を使い切るのことで、一番よくって土地を使い切りはしないが投げやりしておくということになるのです。それ故、何もしない地主は、少しばかりの現金を苦勞なく集める代りに、自分にとって、あるいは子供たちにとって大きい損失、大きい苦しみの種を蒔き、時には世襲財産の破滅をも招くことになるのです。とはいえわたしは請作人以上に大きな費用をかけて耕作していることを認めぬわけではありません。しかし、その請作人の利益もまたこのわたしが儲けているのでして、しかもこの耕作の方が遙かに優れているので収穫 (produit) は遙かに大きいのです。従って、余計に費用はかけますが、依然として儲けがある」(1-549、1-246~247)のである。

#### イ 自給自足、非貨幣交換、家政の均衡収支

さてクララン農場の生活に必要な品物の獲得や農場の生産物の扱いはどうなっているのでしょうか。ルソーは次のような長い一文を書いている。

(3) 岩波文庫版の「原著者注」としてパーツとは「この国の小銭」(petite monnoye du pays) とある(1-443、1-306)。

「あらゆる刺繍、…レースは女子部屋から造り出され、あらゆる織物は養畜場で紡がれたり、…扶養している貧しい女たちの中で紡がれます。羊毛は工場に送られ、それと引換えに召使たちに着せるラシャを貰いますし、葡萄酒も油もパンも家内で造られますし、木の年伐量は家で消費できるだけあり、肉屋は家畜で支払われ、食料雑貨屋は納品の代価として小麦を貰い、労働者と召使いの俸給は彼らが改良する土地の産物から得られ（le salaire --- se prend sur le produit desterrés<sup><補注></sup>）、町に持っている貸家の家賃は住んでいる家の家具を供するに足り、公債の年金は主人たちの生活費を支弁し、かつ少しは使ってもよいことにしている銀食器の費用をも支弁し、残った葡萄酒と小麦を売って出来る資金は不時の出費に取って置かれます。この資金はジュリさんの慎重さのためにけって涸渇することはありませんが、またその慈悲心のために殖えることはなおさらありません。あの方は純然たる娯楽には、家の中で行われる仕事からの利益、開墾した土地からの利益、植えさせた木からの利益などの外はお宛てにならないのです。ですから生産物と使用とは常に物の性質に依って償われていますので、均衡（balance）が破れることはあり得ず、家政が紊乱することはあり得ません。」（1-551～552、1-250～251）。

以上を見ると、葡萄酒、パン、油、織物、材木などは自家製で調達し、肉や食料、召使い用の衣料は物々交換で、労働者と召使いの俸給も現物支払いとなっている。貨幣が介在するのは家具の購入と主人たちの生活費などを賄う年金ぐらいである。生産物を売って貨幣に代え、それで商品を購入する、金銀貨幣を媒介とする交換経済（市場経済<sup>(4)</sup>）にかかわるのは、使い残りの葡萄酒と小麦のみとなっている。

こうした非貨幣交換経済について夫妻は「わたしたちが裕福になるための大きな秘訣は、お金を殆ど手に入れないようにし、わたしたちの財産を使う場合に生産物と使用との間に介在する交換を出来るだけ避けるようにする。…わたしたちにある余剰をわたしたちに欠けているものに換えざるを得ない場合も、金銭的な売買は損害を二重にするので金銭的な売買はせずに、現物の交換を求めています。現物の交換では契約者各自の便誼が両者いずれにとっても利潤の代りになる」（1-548～549、1-245～246）と述べている。

ここにはルソーの貨幣観の一つがあらわれていようが、この考え方は『政治経済論』の「商業や工業は田舎の貨幣のすべてを首都に引き寄せる…都市が富めば富むほど、農村はますます惨めになる。」（4-274、4-59～60）という言葉や「コルシカ憲法草案」の「スイスにおいて貧困が感じられるようになったのは、そこに貨幣が流通し始めてからのことである。貨幣は、財産に不平等をもたらしたのと同じく、生活の手段にも不平等をもたらした。貨幣は、致富のための強力な手段になったが、何も持たない人々はその手段さえも奪われた」（5-906、5-305）という一文などにあらわれている。ルソーにとって貨幣はそれが商品交換経済の道具として使われる時には、人間の間の不平等を生み出すばかりかそれを促進し、農村を疲弊させるものであり、市場経済との関係をなるべく避けようとする、クラランでは忌避されるべきものであったのである<sup>(5)</sup>。

なお、上記引用文の最後にあるジュリの資金管理に関する一節には、娯楽費には家庭内の仕事など

(4) フレーデンは、脚注〔A〕前記（1）のカでルソーの「自給自足神話」に関する「ガグヌパン」とレイモン、スタロパンスキーの解釈に反論またはコメントを加えている（原書「3 The market as a brothel」訳書「第2章 売春宿のごとき市場」）。

(5) 同（1）のカでフレーデンは「まさにルソーは、市場交換の「有用性や重要性」を認めることができないがゆえ、「貨幣や市場経済」に反対しているのである」と述べている（原書P.39訳書44頁）

(補注) 別の訳では「給金に当てられるのは、…土地の産物です」とある。白水社版『ルソー全集』第10巻192頁、松本勤訳。

からの収入を充てるなど、均衡の取れた家政収支を確実にすることへの配慮が読み取れる。ルソーは『政治経済論』で、「エコノミーという言葉は、…元来は家族全体の共同利益のためになる、賢明にして法にかなった家政 (gouvernement de la maison) を意味するもの」(4-241、4-7) と述べている。ジュリの資金管理は、こうした家族全体の共同利益のための賢明な家政の方策の一つとされていると考えられよう。

ルソーはさらに自給自足志向の経済が人間にもたらす豊かさと輝きを、「土地の産物を貢ぎ取りが貪る…惨めさ、欲深い請負徴税人のあくどい貪欲や、非道な主人の頑固な苛酷さ」がもたらす田舎の人馬の悲惨さ、「荒屋ばかりの部落」の「傷ましい眺め」などと比較して次のように述べているが、そこには、一種の高揚感のようなものさえ感じられよう。

「善良で賢い管理人が自分の土地の耕作を自分の施す恩恵の手段とし、自分の娯楽とし、快楽とし、神の賜物をどっさり頒ち与え、周囲のあらゆるものを、人をも家畜をも、自分の納屋、穴倉、屋根裏に溢れている天与の富で肥えふとらせ、豊かさと歓喜を周囲に積み重ね、自分を富み栄えさせる労働を不断の饗宴にしていることを見ることは何という魅力でしょう！」(6-603、6-36)。

上記の文中ルソーが自給自足経済の豊かさを、「貢ぎ取りが貪る…惨めさ、欲深い請負徴税人のあくどさ」と比較していることは、クラランの農場経営が領主などの支配から独立した自主自律性を保っていること、またそのことがクラランの繁栄をもたらす一つの要因になっていることを示唆するものと思われよう。

なおのちにルソーは、「コルシカ憲法草案」の中で「人民が、その国土の全表面に行きわたり、そこに定着し、国土のすみずみまで耕作し、田園の生活と労働とを愛し、農村の内部で生活必需品も生活の楽しみとともにたっぷり手に入るの、そこを離れたいとは夢にも思わない、そういう状態をもたらすような体制」(5-904、5-289～290) を基本とする自給自足体制を取ることを「コルシカ人の立法の基礎となるべき諸原則」(5-904、5-289) の一つとして、住民の分散・定住その他の「条件づき」で、推奨することとなる(フレーデンはこの「条件づき」に注意して「条件付きの(圈点フレーデン)自給自足のための政策の提言<sup>(6)</sup>」と述べている)。

## (2) 計画的で存続が確実な経営と節約・管理重視の運営

クララン農場に見られる他の特徴は、その経営が計画的で将来にわたる存続を確実化する政策を採用していること、及び節約と管理を重視する運営に努めていることである。

### ア 経営における計画性と存続確実性

農場経営が予想外の禍や不可避的な危険によって破綻しないように、ヴォルマールは次のような計画的な経営政策を打ち出している。

「唯一の用心は資本 (capital) から1年間の生活費を出して、それだけの費用は前もって収入 (revenu) の上に残るようにすることでした。従って収益 (produit) は常に消費に1年間先んずるのです。…少しでも思いがけない出来事にあえば破産しかねないような窮策に訴える必要がないという利益は、すでに幾度びもこの事前の支出を償うに足りました。こういうわけで、…秩序と規律が儉約の代りになっており、消費したものによって富を得て」(1-529、1-218) いる。

(6) 前記(1)のカでフレーデンは「ルソーは条件付きの自給自足のための政策を提言する」と述べている(原書P.95訳書141頁)。

即ちヴォルマール（土地所有経営者）は、翌年度の生活費の額をあらかじめ予想、あるいは計画して、その額をそれまでの蓄積（資本）からいわば前払いしておき、残りの蓄積分を当年度の生産活動や予想外の出来事の出費などに充てると同時に、生産活動から生じる利益が、前払いした生活費と同額になるようにするのである。これが、毎年度の生活費が資本の減少を防止しており、クララン農場の「秩序と規律」、つまり計画的な経営のかなめとなっているようである。

こうした経営の計画性は同時に、農場の将来にわたる存続を確実にするものだが、この政策以外にも彼は「世襲財産を大きくするよりも、むしろ改良する…お金を有利に投資するよりは、確実に投資」する、つまり「新しい土地を買う代りにすでに持っておられる土地に新たな価値」（1-529、1-217）をつけることに努めている。この結果、農場では「過去の骨折り（labeur）の成果が現在の豊かさを支え、現在の骨折りの成果が来るべき豊さを予告し…消費するものをも収益するものをも同時に享樂し、種々様々の時が集積して現在の安全を強固にしている」（1-551、1-250）ので、将来とも存続確実な農場経営がつづくことになるわけである。

### イ 節約と管理

ヴォルマール夫妻が心がけているものの一つが「節約」（économie）で、「町の生活はずっと高く」つくが、田園生活はそうではない。身のまわりには「有益なもの以外」（1-549、1-247）はなく、衣食、家具、装身具も地産または国産の質の良いものを用いている。1回の衣食に何着分も何日分もの費用をかけることはできるが「同時に2着を着ることはできず、一日に昼食を二度摂ることも」できない。「自然はあらゆる方面においてわたしたちを制している」ので「儉約と配慮とに依って自分の財産を上廻ることができる」（1-550、1-249）のである。

これがクラランの節約の目的でもあるが、ちなみに羽鳥卓也は「もしもこうしたヴォルマール夫妻のような生活態度が国民的規模にまでひろがるならば、その社会の福祉の拡大は十分に期待しうるものとなろう」（7-34）と評している。

さらに夫妻は日傭労働者や召使いの管理に熱心である。「労働者には監視人がついていまして、彼らを激励し、かつ見守ります。…その上に、ヴォルマールさん自らほとんど毎日、しばしば一日に数回も彼らを見廻り…夫人は好んでこの散歩に加わられます」（1-443、1-87）。また男女関係についても「男と女の間に関わしい関係の生ずることを防ぐために…絶えず男と女を忙殺する」（1-451、1-98）という「秘法」がジュリによって取られている。さらに外出することで「小料理屋に出入りすること、仲間とのつき合い…品行の悪い女と馴染むことなどから主人にとっても彼ら自身にとって駄目な人間」になることを防ぐために「家で飲酒と勝負ごと」（1-454、1-102）をする。「家の背後に木陰になった小径…に競技場が造られ…上働きの召使いたちと庭働きの召使いたちが集まって、連続勝負」（1-454、1-102）をするなどが工夫されている。召使いたちの管理の秘訣は、お互いを「できるだけ巧く取り合わせてから、今度は言わば彼らを強いてお互いに世話をさせあうことによって、言わば否応なく一体にさせ、各人にとつてすべての仲間から愛されることが著しく利益になるように仕向けさせます」（1-462、1-115）ということである。ルソーの使用人の労働管理の叙述はかなり長くまた詳細で、『新エロイズ』第四部書簡十の大部分の頁を占めているほどである。ちなみに同書の訳者、松本勤は「かつて召使であった苦い体験をもち、召使の流儀をよく知っていたルソーは、ここではきわめてリアリストとして事を見ている」（8-45）と述べている。

### (3) 家族的友愛・共益経済

#### ア 家族的友愛

すべての労働者はたとえ監視されているとはいえ、その働き次第で賞与を含む高賃金を獲得できるのであるが、「更にこれよりも有効な手段、経済的な見地からは思いも及ばないもの」、即ち「ヴォルマール夫人に一そうふさわしい唯一の手段」が用意されている。それは「これらの善良な人々に自分の愛情を注いで彼らの愛情を得ること」である。夫人は「彼らの喜び、悲しみ、境遇を共にされ…一身上の問題を調べ、彼らの利害をご自分の利害にされ、彼らのために無数の配慮を引受けられ、…助言を与えられ、…紛争を調停され…真実の世話と不断の親切な行為によってあの方のご性質の温情」を示す。これらは「素晴らしい強い力」を発揮し、労働者たちは「唯一日」仕えただけでも「みなあの方の子供」(以上1-444、1-87～88)になり、召使いたちは「ただ父母を変え…もっと富裕な父母を得たというだけ」(1-445、1-90)になり、「この家では召使が暇を願い出たという例はありません」(1-447、1-93)ということになる。

こうした、母親が家族に向けるようなジュリの優しさはまた、不幸な人々をも包み込もうとするものである。ジュリにとって「惨めな人々を見ながら幸福にしていることは容易ならぬこと」で、「苦しみを癒やしてやるために自ら探し求めて」(1-532、1-221)行き、その結果「近隣の住民をすべて知っておられ、言わば我が家の境內をそこまで拡められ」ることになる。彼女は、「人間の生を縛っている悩みと苦しみの感情を悉くそこから遠ざけるためにはいかなる尽力をも惜しまれない」(1-532、1-222)。

ここにはルソーが既に『不平等論』などで主張している「憐れみの情」、即ち「同胞の苦しむのを見ることを嫌う生得の感情から自己の幸福に対する熱情を緩和する…人間にとって有用な徳」(2-154、2-71)の姿を見出すことができよう。

ジュリの徳性の影響はその周辺の人々にも拡がっていき、ジュリが入っていく「家は悉くやがてあの方(ジュリのこと-引用者注)の家のような光景を呈し…和合と品行方正は家庭から家庭へとあの方に従って行き…ジュリさんに接する者は一人として徳に無関心ではありません」(1-533、1-223～224)ということになる。これらには女主人公の徳性が農場関係者の徳性の涵養に良い影響をもたらすとのルソーの考え方があらわれているものと思われる。

ヴォルマール夫妻と労働者たちの関係をうかがわせるものが、「同じ葡萄畑からあらゆる産地の葡萄酒を採るための魔術的な操作」の場面描写である。そこでは「すべての人々はこの上なく親密に暮し、あらゆる人々は平等でありながら、しかも自分の身分を忘れる者は一人もいない」(6-607、6-40)。夫妻も自宅に帰ることはなく「終日葡萄畑で暮す…百姓たちと一緒にあって働きもすれば…一緒に…彼らの食事時に昼食を食べる(6-607、6-41)」。「ここに行きわたっている甘美な平等は自然の秩序を元に戻し…あらゆる人々に対して友愛のきづな(lien d'amitie)となっている」(6-608、6-42)とルソーは述べている。

クララン農場経営の特徴の一つは以上のように家長(maitre)(1-470、1-127)のヴォマールと、非血縁者である被雇用者たちの擬似的な母であり、また主婦(maitresse)(1-470、1-127)である、ジュリを中心とした、家族的友愛にあるとってよからう。

#### イ 共益志向

前節で見た自給自足経済の経済的な目的はどこにあるのであろうか。前節で引用したように耕作か

ら最大限の生産をあげる目的は、「いっそう大きな利益をあげるためではなく、一そう多くの人を養うため」であり、多数の日傭労働者を必要とすることは「多くの人々を苦勞なく衣食させる喜び」(1-443、1-86)を夫妻に味わせているのである。またこれも前節で見たように農場の生産物が、市場で営まれている貨幣と商品の交換経済の場に出るのは、使い残りの葡萄酒と小麦のみで、農場は極力市場経済との接触を回避している。さらに蓄積分は農場主などの生活費に充てるように年々前払いされ、毎年の生産から得られる利益はこの生活費と同額となるようにされて蓄積分の減少を防ぎ、家政は収支均衡が保たれるように配慮されている。これらの結果、富はもっぱらクラランという農場の維持と将来にわたる存続のために使われることになる。即ち換言すれば自給自足の非貨幣交換経済は、この農場組織の維持と存続を十全のものとすることを志向しているといつてよかろう。そこには通常の市場経済活動を目的とする私益の最大化への顧慮はなく、非営利、脱私益の考え方の元でクララン農場の利益、即ちその維持と存続の現実性の極大化、その構成員の福利の最大化を目指していると考えられよう。

さて既述の通り、この農場には家族的友愛が満ちているが、日傭労働者などに対するヴォルマールの態度も監視者は置くものの、そこには優遇、恩恵、温情があることが見てとれよう。また高賃金を与える一方で必ずしも人間関係を賃銀関係にすっかり還元してしまうこともなく、ヴォルマール夫人は「人が自分のためにしてくれる骨折（peines）に対して金をもってすれば済むとは思われず、誰でもご自分に奉仕してくれた人に対しては奉仕の義務を負っていると考えておられる」(1-444、1-87)のである。他方ヴォルマールも「人間はとても高貴な存在ですから、単に他の人々の道具に役立つべきものではないのでして、その人自身に都合の良いことをも考えあわせないで、他の人々に都合の良いことに利用してはなりません。と言いますのは、人間は職のために出来ているものではなく、職こそ人間のために出来ているものなのだから。他人の利益のために…一人の人間の魂を害うことも…決して許されることはありません」(1-536、1-228～229)と述べている。ここにはいわば協同的組織の中で生きかつ働く人間についてルソー自身の描く、いわば「協同体人」の人間像があらわれており、道具的な人間の雇用や隷從的な労使関係の排除の方法を示唆するものと思われよう。一方ヴォルマール夫人は実は、「あらゆる境遇の中で最も幸福な境遇」が「自由な国家における村民たる境遇」であると考えており、この考え方に従って「この人々が少なくなつて、他の身分の者が殖えるということにならないように」、被雇傭者たちの「境遇を変えることに好意を示さず、各人をその境遇において幸福にするように力添え」(1-536、1-228)をしているのである。田舎の労働と幸福とは「結びついているのが目に見える」(on'y voit attaché) (6-604、6-36)のものであり、ここにはジュリにおける農業協同体的組織の労働者観の一端が示されていよう。ちなみに飯岡秀夫は、彼女の手紙の中の次の一節を引いてジュリ自身の仕事の究極目的について説明し、「クララン農場という、「小さな共同体」の建設のための、そこに宇宙的秩序を実現するための労働こそ、彼女の道徳的生の実践である」(9-91)と述べている。

「神に仕えるとは祈祷所で跪いて一生を送ることではございません。…それは神の課し給う義務を地上で果すことです。神がわたくしたちを置き給うた境遇にふさわしい一切の事を神に喜ばれるために行うことです」(6-695、6-196～199<sup>(7)</sup>)。

(7) ジュリはこう述べつつ、他方「人間界の事は空しい」「幸福がわたくしを倦怠させている」(6-693～694、6-194)と告白している。

## 2 クラランの経済的世界に見る自然界の諸相とルソーの自然観

『新エロイズ』には多くの自然描写やルソーの自然観が見られ、その一部は既刊の拙論<sup>(8)</sup>でも取り上げてみた。そこではクララン農場についても「家のごく近く」にあるが「何処からも見えないくらい隠されている」「果樹園」即ちジュリの「エリゼ」を検討した。そのためここでは「エリゼ」以外の、前節のような経済的活動が営まれる田園世界の叙述について、どのような自然描写やルソーの自然観があらわれているかを吟味してみたい。

### (1) 魂の状態の反映としての自然描写

第四部書簡十は、種々の苦労や冒険を乗り越えて再びクラランに帰ってきた主人公サン＝ブルーが見た「快い、胸を打つ光景」の描写から始まる。それはまず「田園、陰遁、安息、季節、眼に映る広大な水の原、山々の未開の姿」(1-441、1-83)である。この光景は「甘美な…純粋な喜び」を彼に味わせるのだが、これらには遠洋航海を経て長期に及ぶ不在のあとで漸く昔の恋人が居るところに戻ってくることを許されたサン＝ブルーの昂揚した感情が反映されているものと思われる。上記の一文は「山々の未開の姿」などクラランの家がある場所の背景をなしている遠景を含むものと推察できるが、こうした昂揚感は彼がさらに住居部分の中に入って昔とは異なる改造が加えられた光景を家の内外にわたって見ていく描写にもつづけて反映されているようである。それは「もはや見るために出来た家ではなくなり、住むための家」(1-441、1-84)になっている。「中庭が拡張され…庭園を潰して第2の菜園が造られ変装したこの花壇は前よりもっと見た眼に快い。…陰気な水松は立派な樹牆に取揃えられ、役にも立たぬとちの木に代わりに黒い実の桑の若木を庭につくり始めて」(1-442、1-85)いたのである。この結果「至るところで、快いものが有益なものにあらためられたのですが、そのために至るところがほとんど常に一そう快くなった」(1-442、1-85)と感じられた。この住居部分の描写は次の一文で終るが、そこでは動物と人間がかもし出すさまざまな音風景(サウンドスケープ)や野良の光景、それに農業用具の持つ雰囲気などが揮然一体となっていて、多数の日傭労働者や召使いなどを使って自給自足経済を営む大農家の光景の一端が生々と描出されている。

「中庭の騒音、雄鶏のときの声、家畜の鳴き声、荷車に家畜をつなぐ音、野良の食事、労働者の帰還、それから農政のあらゆる用具がこの家に今までよりも一そう田舎じみた、生々とした、発刺たる陽気な姿を、…何かしら歓喜と安楽の匂いのするものを与えている」(1-442、1-85)。

### (2) 都会との比較による田園讚美

ルソーの自然観の一つが都会の生活を排し、田園生活を讚美する態度にあることは、既刊の拙論<sup>(9)</sup>の一つでも見た通りである。彼のこうした自然観は、クラランの描写の中でもくりかえし強調され、その主張の効果をあげているようである。たとえば、「都会の人々は田園を愛するすべを知りません…彼らは田園の労働、快楽を軽べつしています。…パリの住人が自分では田園に行く気でも実は田園に行くのではなく、パリを伴って行く」(6-602、6-34～35)、「人間にとって自然な状態は、土地を耕し、その産物によって生活すること…人間の真の快楽はすべて田園の住民の手の届くところにある」(1-534、1-226)、「田園の労働は眺めるのに楽しいものですし、牧畜と農耕の生活の素朴さには常に人の胸を打つ何か」(6-603、6-35)があるなど、その例証には事欠かない。

(8) 前記(2)の『文教大学国際学部紀要』(以下『紀要』という)第10巻第2号など参照

(9) 同上(8)

### （3）生産力豊かな大地—葡萄畑の描写

ルソーが持つ多様な土地観については既に拙論<sup>(10)</sup>でも触れたところであるが、大地の有する富の生産性の豊かさからも彼は大地を讃美している。以下はサン＝ブルーがジュリとともに、クラランから離れ、沖へ出て遊ぶシーンの中の一文だが、次のように述べられている。

「大地は土地を自分たちのために耕す幸福な民にはその豊満な乳房をくつろげ、その財宝を惜しみなく与えます。大地は自由の甘美な光景を見てほほ笑み、活気づいているようです。大地は人間を養うことが好きなのです」（1-515～516、1-199）。

ここにあらわれた生産力豊かな大地の姿はクラランの経済的世界では、葡萄畑の描写にあらわれているようである。畑の生産力が一気に溢れ出すのは次の（4）の「収穫期の饗宴」のシーンでも描かれるが、他にも例えば「ヴォルマルさんがこの地で所有しておられる最も優秀な土地は葡萄畑」であり、また前節でも見たように夫妻は労働者とともに「終日葡萄畑で暮らす」ほか、子供たちも「半日葡萄畑」（6-606、6-41）で過している。さらに「葡萄の収穫期の始まり」には「葡萄の房がむき出しになり、バックスの贈物を人目に曝し、それを取るように人間を誘っている…幸薄い者にその惨めさを忘れさせるべく天が勧めるこの恵み深い果物をつけたあらゆる葡萄の木」（6-604、6-37）などの叙述もある。なお、白葡萄酒や甘口や辛口の葡萄酒、苦よもぎ（アブサント）入りの葡萄酒、マスカット葡萄酒などの製造上の操作について、ルソーは「このようにして節約のための巧みな工夫は多種多様な土地の代りを務め、二十種もの風土（climats）を唯一つの風土の中に集める」（6-606、6-40）と述べて、いわば土地の生産力に準じるようなものとして、人間の加工技術の力をあげている。

### （4）田園労働に晴の舞台を与える自然

クララン農場におけるルソーの自然描写の圧巻が有名な収穫の祝祭時のものであろう。ここでは次の引用に見るように、丘や大地、太陽、霧などが収穫労働の諸相に華やかな照明をあてており、自然が労働の祝祭のために、素晴らしい舞台を提供しているものとして描写されていることがわかる。

「ここかしこの丘に響きわたる葡萄摘女の歌声、収穫した葡萄を搾汁機のところへ持って行く人々の絶え間ない歩み、彼らを鼓舞して働かせる田舎楽器の唄れた音、このとき大地一面に広がっているように見える遍き歓喜の愛すべき感動的な絵巻、それからまた朝太陽がかくも魅力豊かな光景を人間に開いて見せるべく、まるで舞台の幕を上げるようにかかげる霧の幕、一切が協力してこの光景に祝祭の姿を与えているのでして、しかもこの祝祭は、ただこれのみが人間が有益なものに愉快なものを結び合わせることでできた祝祭である」（6-604、6-37）。

上記の描写では自然の方がまるで人間の祝祭を喜び、自分が持つあらゆる舞台装置とともに、すすんでそれに参加しているようでもあり、ルソーの筆の躍動ぶりがうかがわれる。

### （5）神と自然

ジュリは神を信じる者であるが、彼女は「至る所に神の恵み深い御手を認められます。…大地の産物から神の賜物を取り集められ、食卓が神の配慮によって賑わうのを見られ…至る所に人間の共通の父を見られる」（6-591、6-16）と述べている。この「至る所に神の御手を認める」という一節は、既に拙論<sup>(11)</sup>でも見たルソーの汎神論的な考え方があらわれているものと考えられる。クラランではこ

(10) 前記（2）の『紀要』第10巻第1号など参照

(11) 前記（2）の『紀要』第15巻第1号など参照

れが、無神論者であるヴォルマールとの対比によってさらに強調されているのが特徴的であろう。ジュリと夫との散歩を他から見ると「一方は大地の繰りひろげる豊饒な輝かしい装いの中に世界を造り給うた者の御業と賜物とを讃美され、他方はそういう物に、盲目的な力によって縛られていないものは一つとしてない偶然の結合しか認めない…これほど発刺としている自然の光景が、不幸なヴォルマールの眼には死んでいる…万物がまことに甘美な声で神のことを語っているこの様々の存在の大きな調和の中において、あの人はただ永遠の沈黙しか認めない」(6-591、6-17)とルソーはジュリに語らせている。

以上前節で述べたような、クララン農場で展開する経済的世界の描写に際しても、ルソーは自然界の描写や自己の自然観を巧みに生かして使っていることがうかがわれよう。クラランにおける経済的世界はいうまでもなく、大地などの自然界を舞台としてくりひろげられているが、クラランは農業協同体的組織あり、またその主役は田園で働く農業経営者とその従事者であるために自然と人間との結びつきが、いっそう色濃く描き出されているといえるであろう。

### 3 クラランの共益経済と現代の「社会的経済（協同経済）」論<sup>(12)</sup>

クラランの農場経営の特徴は前述の通り、自給自足、非貨幣交換経済を主としており、また脱営利で節約、管理、家政上の収支均衡に配慮し、農場の将来につづく存続を計画的にめざすなどにあると理解することができる。これらの点は、現代の経済論の中でも最近注目されている、「社会的経済（または協同経済）(Économie Sociale)」論の特徴や活動と比較した場合、そこにどのような意味が見出されるであろうか、以下で一見したい。

#### (1) 社会的経済（協同経済）論とは<sup>(13)</sup>

##### ア その歴史

学説史の解説では「社会的経済論の歴史は古く、すでに19世紀のフランスを中心に、資本主義的市場経済のもたらす悪弊の是正を目的とする理論と運動に関してéconomie socialeという概念が用いられていた」(10-451)。「社会的経済の擁護者たちは、産業革命が人間にもたらす恐ろしい犠牲を自覚し、当時、支配的であった経済学が社会的な側面を無視していると批判した」(10-12)とされている。またこれらエコノミ・ソシアル派はつぎの「4つの学派に分類することができる」(10-451)としている。

##### ① 社会主義的な伝統

資本主義化に伴う貧困化などの社会問題の解決・国家の干渉主義に対し、それぞれ協同原理（アソシエーション）の優位を説き（R.オーウエン、W.トンプソンなど）、J.S.ミルの主張〈将来社会の構成

(12) 後述の本文にあるように、「社会的経済」の下記の研究では、この名称について「基本的概念が国際比較分析にとって有効なもの」であること、また日本では「公的セクターと私的セクターとを前提とする両者の混合形態と位置づける」必要があること、「日本型「第3セクター」が存在していることなどの「日本の特殊性を考慮して、日本語としてわかりやすい用語を選ばねばならない」などを配慮し、「思い切って「協同経済」という言葉を用いる」としている。

富沢賢治 川口清史編『非営利・協同セクターの理論と視点—参加型社会システムを求めて』日本経済評論社1997年、13頁、17頁、18頁

(13) 以下「社会的経済（協同経済）論」の説明では、まだその語義が十分理解される途上にある事情に配慮し、関連文献を参考にやや詳しく述べることもある。

原理を協同組合主義とする〉につながる学派

② キリスト教社会主義の伝統

カトリックの影響のもとで生産者の労働・生活条件の改善のため、生産者自身がアソシエーションを認識すべきだと主張（サンシモン主義の伝統をくむビュシュ）し、キリスト教社会主義の立場から産業革命に伴う社会問題解決のために社会改革を推進することがエコノミ・ソシアル運動の使命とする（F.ル・ブレなど）学派

③ 自由主義の伝統

国家の干渉に反対する一方、民衆のアソシエーションを支持し、協同組合主義に結びついていく学派で、社会認識の理想的形態として民衆の互助組織であるアソシエーションを支持する（レオン・ワルラス）学派

④ 連帯主義の伝統

生産や消費などの経済領域における社会的連帯、協同の重要性を強調し（ジャン・ジョレス）、フランス革命以来の私有財産と自由の権利を犠牲にすることなく、連帯にもとづく相互扶助を発展することで資本主義社会を改良していこうとする学派（シャルル・ジード）

これらの考え方は20世紀はじめまである程度の発展をみたが、その後「資本主義批判論は…マルクス主義に…他方では社会民主主義的な福祉国家論に吸収され…急速にその影響力を失っていった」（10-453）。しかし1970年代以降、社会主義経済体制の崩壊、先進資本主義諸国の福祉国家体制の弱化、政府と市場の失敗による経済体制の反省などから再び「経済的な効率と社会的な福祉との総合的な実現をはかる経済理論の再検討が開始されるようになった」（10-453）。この「新しい社会的経済の理論の特徴」として次の2点があげられている<sup>(14)</sup>。

- 1 「市場経済に基礎を置く混合経済体制の中で、公共セクターとも私的セクターとも異なる独自の…セクターの役割に注目している」理論であること。
- 2 「人間の社会的生活だけでなく、その基盤をなす自然環境の保全をも目的とする経済運営のあり方を探る経済理論」であること。

「その意味で、現代の社会的経済論は、経済成長を基本目的とする政治経済学を批判して、人間と社会と自然のバランスのとれた人間社会の発展をめざす経済システムのあり方を探る経済理論」（10-454）とされている。

なお最近、先進資本主義諸国などで協同組合や共済組合などの非営利部門が「急速に増大しつつある」という「客観的事実が現代の社会的経済論の発展の基本的要因をなしている」（10-454）とのことである。

イ. 現代の社会的経済の定義と日本における協同経済組織の原則

以上のような歴史を経て、今日再び登場した社会的経済について1990年3月、ベルギーのワロン地域圏社会的経済評議会が採決した定義は次の通りとのことである（11-37）。「社会的経済は、主として協同組合、共済組織、非営利組織という形態をとる、あるビジネス倫理をもった会社によって営まれる経済活動からなる。その倫理は次のような諸原則で表される。①利潤よりもむしろメンバーあるいは共同社会への奉仕を目的とすること、②管理の自律性、③民主主義的意思決定のプロセス、④収

(14) [B] の10の454頁以下による。

益の配分における、資本に対する人間及び労働の優位」。

ところで上述のアの1で、社会的経済理論は、公的、私的両セクターとも異なる独自のセクターの役割に注目しているとあるが、日本の場合は、地方公共団体や国と民間企業との共同出資で設立される事業体より成るセクターとして、「第三セクター」(11-12)がある。こうした「日本の特殊性を考慮して、日本語としてわかりやすい用語を選ばねばならない」という事情がある。このため日本のある研究書では、「日本では…「社会的」の意味内容がそのままでは…十分に理解されないと思われ…思い切って「協同経済」という言葉を用いることにした。「協同経済」というと「協同組合の経済」と理解されかねないが、協同組合という形態にとらわれずに「協同」を理解することは、それ自体重要であるし、また用語的には「社会的」という概念よりも「協同」という概念のほうが一般に理解されやすいと考えた」と述べている。そして「「協同経済」という用語を核として、協同組合経済を担う組織を「協同経済組織」…と命名することにした」。さらに同書ではこの協同経済組織を次の原則に基づいて「組織され、運営される組織である」としている(以上11-17~18)。

#### A 組織原則

- 1 開放性 (開かれた組織。自発性にもとづく加入・脱退の自由)。
- 2 自律性 (政府その他の権力の直接的統制下でない自治組織)。

#### B 運営原則

- 1 民主制 (1人1票制を原則として民主主義と参加という価値にもとづいて運営される組織)。
- 2 非営利性
  - ①投機的利潤の排除 (利潤獲得ではなく、メンバー相互の利益および、または一般の公共的福祉の向上を目的とする)。
  - ②資本に対する人間の優位性 (活動過程と利潤分配において、資本の権利ではなく人間を優先させる)。

以上における前記ベルギーの社会的経済の定義(以下「前者」と)と上記日本の協同経済組織の運営原則など(以下「後者」と)を比較すると、後者のAの1の開放性が前者で表現されていないが、「自発性と加入脱退の自由」を「社会的経済の企業の原則」(10-467)の一つとしている研究者(ミュンクナー)もいる。残りについても、前者の①が後者のBの2の①と、前者の②が後者のAの2と、また前者の③が後者のBの1に、そして前者の④が後者のBの2の②と対応するので、結局両者は殆ど同じものと見られ、後者は「第三セクター」の用語の普及など日本の特殊事情に配慮した呼称に過ぎず、内容は前者と大きくは変わらないと理解できよう。

#### ウ 経済セクターの分類<sup>(15)</sup>

上記で引用した同じ研究書によると、協同組合運動の理論家フォーケは、経済セクターを次の四つに区分したとのことである。

- 1 公共セクター
  - ① 政府・地方自治体により運営、管理される全企業、
  - ② 公権力が部分的にもそれを通じて経済に影響を与えようとする機関
  - ③ 全公共施設、公共事業が含まれる。
- 2 資本主義セクター
  - ①危険負担によって利潤を追求する私的資本が支配する企業
  - ②主に株式会社からなる全私的営利企業が含まれる。

(15) 以下〔B〕の11の62頁~63頁による。

- 3 狭義私的セクター 家計、農民経済・職人経済などの無数の小規模、非資本主義（前資本主義）経済主体が入る
- 4 協同組合セクター 全種類の協同組合運動が含まれるが、この運動はフォーケの語るところでは家族や、農民・職人経済という小経済単位から生じるもので、「労働に対する資本の優位を追放し、不労所得を排除する」。これは共同事業の運営を通じて組合員の道徳性を改善することを願うものである。

## （2）クラランの経済的世界と「社会的経済」、「協同経済組織」との関連

ここで、本稿の最初で見たクラランの経済的世界に見る特徴と、その後で見た現代の「社会的経済」ないし「協同経済」やその運営主体としての「協同経済組織」の特徴とを比較してみたい。

### ア 共益（協同体益）、脱営利・自律

クララン農場の目的は、より多くの利益をあげるためではなく、より多くの人を養うためであり、それは農場主にたくさんの人々を苦勞なく生活させる喜びを与えていた。つまり経営の目的は市場交換経済を通じて営利を追求するものではなく、この協同体的組織がそのメンバーの福利の増進に配慮しつつ収支の均衡を保って長く存続していくことに置かれていた。さらに自給自足体制の豊かさが「貢取り」や「徴税請負人」の苛酷な取立てによる惨めさと比較されている所は、クララン農場が政府や行政の介入とは一線を画する自律性を保とうとしていることをうかがわせるものであろう。

これらを前節で見た「社会的経済」や「協同経済組織」の特徴と比べると、利潤よりもメンバー相互や協同社会の利益、福祉など、いわば共益性、脱営利性という点で両者に通底するものが見てとれよう。また管理の自立性についても前述のように、ルソーが上記の比較によって行政介入の不在を示唆しており、また文中にも管理の他律性をうかがわせる場所が見当たらないので、農場が自立的に管理されているとの印象をもつことができよう。勿論両者の間には2世紀に及ぶ時が流れており、詳細に見れば、細かな点で違いがあろうが、互いに志向する大きな方向といった点については、一定の通底性が認められるではなかろうか。

### イ 人間像、労働者観

クラランで働く人々に対しては、巧みな労務管理政策が取られていた。しかしその一方では、家族的な友愛感情が溢れており、ヴォルマールは人間は職のためにできているのではなく、職こそが人間のためにできている、人は単に他の人々の道具に役立つべきものでもなく、他人の利益のために一人の人間の魂を害うことは決して許されないと人間観を持っていた。ジュリもまた人が自分のためにしてくれる「骨折り（peines）に対し、単に金をもって」済ませるとは考えず、被雇傭者の奉仕には使用者側もまた奉仕の義務があると言って、その徳性を及ぼし、その結果被雇傭者の徳性をも涵養するという状態が見られた。

こうした道具的な人間像の排除や雇用主に隷従的な労使関係の否定は、その方向において基本的には「社会的経済」や「協同経済組織」が唱導する、資本に対する人間および労働の優位、活動過程において資本の権利よりも「人間」を優位に置くなどの考え方と一脈通じ合うものが見られるであろう。フォーケはまた、前述の通り協同組合運動が家族や農民・職人経済などの小経済単位から生じるものであり、労働に対する資本の優位や不労所得の排除を進め、組合員（メンバー）の道徳性の改善を希求する旨を述べている。この道徳性の改善はジュリの場合にあらわれていよう。

### ウ 自然と人間、労働との関係

現代の「社会的経済（協同経済）」論の特徴の一つは、人々の労働その他社会的生活の基礎となる自然環境の保全をも目的とする経済運営のあり方や、人間と社会と自然のバランスのとれた人間社会の発展をめざす経済システムのあり方を探ろうとするところにあった。ルソーは既に拙論<sup>(16)</sup>で触れたように、文明化が様々な環境問題をもたらすこと、鉱山や工場の煙と火の渦巻く光景が「田園の仕事の楽しい光景」にかわり、「みじめな人たちの青ざめた顔」が「緑の野や花、青い空、恋する牧人や頑健な農夫たちの姿にとってかわる」（12-1067、12-117）と述べている。

これまで見たようにクララン農場やそこで働く人々にはこうした様子は全く見られず、ほとんどユートピア的な田園の諸相や、喜びと楽しさに満ちた田園労働のありさまが描かれていた。そこでは自然はそうした労働に晴の舞台を提供するものであった。このような人間と労働、またそれらと自然との融和的な関係には、前節などで一見したように、クララン農場の共益志向で脱営利、自給自足の経済体制が貢献している面もあると考えてよかろう。フレーデンの『ルソーの経済哲学』の訳者は、「ルソーの経済哲学の根本議題」は、人々が共有している自然的・社会的環境を、日々の経済活動の中にどのように取り込んでべきかということであったと述べている<sup>(17)</sup>。クラランの経済世界的描写には、こうした自然と経済の調和を志向するルソーの経済哲学の一面があらわれているとも思われよう。

以上、クラランの農場経営にあらわれた諸特徴と「社会的経済」または「協同経済組織」の諸特徴とを比較してみた。一方クラランでは「あらゆる人々は平等でありながら、しかも自分の身分を忘れる者は一人もいない」（6-607、6-40）のである。そこには、協同経済組織などの特徴とされる、「1人1票制を原則として…運営される」民主主義的意思決定のプロセスの存在という意味での民主性は、いまだ未実現のままと推察されよう。また協同経済組織の開放性、つまり自発性に基づく加入脱退の自由のうち、少なくともクラランでは農業以外の職業への転職を理由にした、クララン農場からの離職は、ジュリによって認められないであろう。クラランと「協同経済組織」の間にはこうした違いが認められることも否定できない所である。しかし前述したように、その志向する大きな方向のうちのいくつかの点については、互いに共鳴し合うと思われる所がある。それらはルソーが文明化に伴う弊害を告発したように「社会的経済」（協同経済）が既述の通り、産業革命や19世紀のフランスを中心とした資本主義経済がもたらす悪弊の是正を目的とする運動として始ったという事情があるためとも思われよう。つまり両者は歴史的な事情を異にするものの、ほぼ同じような問題意識に身を浸しており、それが両者間に一脈相い通じ合うものを生み出したとも推察できるのではあるまいか。

## 4 ルソーにおける、その他の経済的意識

### (1) 顕示的消費意識の指摘

多様かつ豊かに残されたルソーの言説には、既にレヴィ＝ストロースが指摘<sup>(18)</sup>している通り、人類学や言語学など多くの学問分野についてそれぞれの学祖や縁者の一人を発見することができる。経

(16) 前記(2)の『紀要』第10巻第1号など参照

(17) 前記(1)のカの263頁(鈴木信雄)参照

(18) レヴィ＝ストロース著・塙嘉彦訳「人類学の創始者ルソー」山口昌男編集・解説『未開と文明』平凡社1969年57頁、59頁参照

経済学の分野ではフリーデンが、ルソーの経済哲学の諸側面を、ルソーの多くの著作から分析している。彼は例えば『エミール』における一文から、ルソーが「金持ちの人々は、他の人間とは異なっていることを顕示するような、また誰もが所有できないものを所有していることを顕示するための財を欲する」と結論していると指摘し、そこに「ヴェブレンの用語で顕示的消費への実行可能性（feasible for conspicuous consumption）（圏点は原書にはない<sup>(19)</sup>）とよばれている…事実<sup>(20)</sup>」を見出している。フリーデンは、『エミール』でのルソーの次の一文を引用している。

「金持ちが何かを尊重するのは、それらの有用性によるのではなく、貧乏人がそれらを買えないことによるのである」、「民衆が羨むものでなければ、私は欲しくない<sup>(21)</sup>」

フリーデンの同書には、この他にも経済学の諸知識に通暁した研究者でなければ読み落していたかも知れない、専門的な読解が見られる。あるフランス啓蒙思想の研究者は、ルソーの言辞には、「その後の発展にてらして初めて完全に理解し得る」（13-8、13-8）ものがあると述べている。ここでフリーデンの読解にならって『夢想』の一節を読み直してみると、次のような新たな読解例が追加できるのではなかろうか。

## （2）WTP意識

ルソーは「第九の散歩」の中で「あたり」の出るルーレットのような回転盤をかかえた「巻せんべい売り」に、それをしたがる少女たちが集まるのを見て、自分の費用で「ひとりづつ順番にやらせるように」と言い、少女たちの引率者を含め皆で大いに楽しんだシーンを描いている。このひとときはルソーにとって「一生のうちでもっとも大きな満足の念をもって思い出されるひととき」（12-1091、12-153）であったが、彼はつづけて次のように書いている。

「その楽しみ（fête）にはたいした費用もかからなかった（ne fut pas ruineuse）。せいぜい三十ルーの金をはらって百エキエ以上に相当する満足が得られたのだ。だからほんとうの楽しみというものとはかかった金（depense）では勘定されない」（12-1091、12-153）。

上記の一節には、商品の価値の起源を資本や賃銀などの生産費用には求めず、消費者がそこから受取る効用、即ち心理的満足に求めた、限界効用学派の理論や、A・マーシャル（Alfred Marshall 1842～1924）の「消費者余剰」（Surplus Satisfaction）の理論にある「Willingness To Pay」（以下「WTP」という。一支払容認価格）の概念に関心を抱く研究者にとって興味を引かれるものがあると思われる。

このWTPについてマーシャルは「人がそのものをなしですせるよりはむしろ、支払ってもよいと思う（He would be willing to pay）価格が、現実に支払う額をこえた超過分、それがこの余剰満足（surplus satisfaction）を測る経済的尺度であり、これを「消費者余剰」（consumer's surplus）と呼んでよい」（14-103）と述べている。つまり例えばもしある人が寒い冬の日に靴下なしですますより、300円出しても暖かくして風邪を引かない方がよいと考えて、店に買いに行ったら、いかにも暖かそうな靴下が200円で売っていたのでそれを買ってはいたところ、とても暖かく、満足したという場合、「消費者余剰」の大きさは、300円（WTP）－200円（実際の支払い額）＝100円という額で示されるというわけである。

ちなみに、この考え方をテレビの視聴者が番組から得られる効用の測定に応用しようという研究が

(19) 前記（1）のカ（フリーデン）の原書49頁訳書61頁参照

(20) 同上

(21) O.C.,t.IV “Émile” P.457、ルソー著 今野一雄訳『エミール』（上）岩波書店1998年329頁

イギリスや日本で行われている。筆者らが試みた研究では、WTPの額を視聴者対象のアンケート調査から求め、その総計（年間総便益）をテレビ局の放送関係経費と1世帯当たりの視聴費用の総計（年間総費用）とを比較し、その差から純効用の大きさを推計しようとした。アンケート調査の結果、NHK教育テレビ以外の一般番組から得られたWTP（夜6時以降）と、同じ調査で尋ねた番組の楽しさ、有用性、必要性、満足度の評価との相関を求めるといづれの項目についてもプラスの相関が得られ、番組のWTPには視聴者が感じる番組の効用感が反映されていることがわかった（15-126）。

前記のルソーの一文は、彼が少女たちを相手にした楽しみのために支払った金額が、「せいぜい三十スー」であり、その支払いから得られた「満足」（Contentment）は「百エキュ以上に相当する」（12-1091,12-153）と伝えている。この満足感の大きさを一種の心理的価額で示そうとするルソーの発想は、マーシャルの発想と一脈通じ合うところがあるといえよう。

彼が「だからほんとうの楽しみというものは、かかった金では勘定されない」と言っているところを見ると、どうやら百エキュ以上という金額はその満足を得るために支払ってもよいと考えた彼の満足感の心理的価額、即ちWTP額を意味しているのではないかと推察できよう。とすれば、ルソーが少女たちを相手にして得た楽しみの純効用の大きさは、1エキュを60スーと換算すると<sup>(22)</sup>、 $(100 \times 60) - 30 = 5,970$ スー以上と、費用の約200倍以上になる。ルソーはまた、自分が費用を払うからと言った時、「この言葉に少女たちはわっと歓声をあげたが、それだけでもうわたしは、そのために財布をからにしても十二分にむくいられる（plus que payé）と思った」（以上12-1091、12-153、152）とも述べている。

上記のルソーの一文には、今日の我々でも、何か大きな喜びや楽しみを得た時によく用いられる表現（とても楽しかったので、もっとお金を払ってもよかったくらいだったとか、安くついて、得をしたなど）に似たものが見出されよう。その意味ではこの部分はふつうは読み過ぎられてしまいそうな箇所とも思われる。しかしフレーデンのようにルソーの経済学的な議論を全言説の中に探索して、それらがどこまでルソー以後に発展した経済学の専門的な言辞に置換しうるかを検討し、その結果をとりまとめることで、ルソー経済哲学の、忘れられた意義を復権させようとする場合、上記の一文も、ルソーの効用観の一つを示す「消費者余剰」の観念に似た考え方の存在を示唆するものとして、フレーデンが他の箇所でも試みているような、ルソーの経済的効用論の分析対象<sup>(23)</sup>に追加できるのではなかろうか。

## 結び

この小稿では以上に見るごとく、主としてルソーが描いているクララン農場の経済的世界を対象に、その特徴と彼の自然観などとの関係や、そこに見られる経済観などと現代の経済論の一つである「社会的経済」論または「協同経済」論との比較を試みてみた。フレーデンの『ルソーの経済哲学』の訳者（鈴木信雄）は、「経済学的議論から経済学者ルソーが消え失せていったのは、経済学の歴史においてルソー的テーマを喪失していったという事実によって説明されうるであろう」と述べ<sup>(24)</sup>、「だから、フレーデンは、同書において、「[人間]のための経済を唱える経済学の復権を強く主張するの

(22) 白水社刊『ルソー全集』第2巻訳注によると、6リーブル、120スーにあたるエキュ貨もあったとのこと（443頁）

(23) ルソーの効用観については、前記（1）のカ（フレーデン）で触れている（原書46頁以下、訳書56頁以下）。また〔B〕の7の20頁～25頁でも論じられている。

(24) 前記（1）のカ（フレーデン）「訳者解説」の258頁

である」と指摘している<sup>(25)</sup>。

国際的にも、経済成長と環境保護が両立しうるような、「持続可能な開発」が叫ばれ、環境経済学や環境社会学などの研究が進展している今日、「経済学的議論から消え失せていった」ルソーが書き残した彼の「経済学」的な議論に、まず経済学の分野から改めて分析の手を加えていく必要性が、いっそう高まりつつあるのではなからうか。クラランの農場にあらわれている経済的世界のありさまは、「ルソー的テーマ」の一つである、「人間」のための共益経済の原型の一つを示唆しているとも思われ、その一端は現代の「社会的経済」や「協同経済組織」の理念の一つとして復活しつつあるのではなからうか。公益の実現をめざす政府などの公共セクターと私益の最大化を図る私企業営利セクターはこれからも発達していこうが、その間に広がって、共益に奉仕するNPO、NGOそれに協同組合、共済組織などの非営利・協同セクターの活動<sup>(26)</sup>が今後さらに発展し、これら三種の混合経済体制の中で、いわば「社会的経済（協同経済）成熟社会」<sup>(27)</sup>が展開した暁には、ルソーが希求した「人間」のための経済がたくましく成長していく姿が見られるかもしれない。そして、このような時代があらわれた時には、ルソーは、そうした社会思潮や「社会的経済（協同経済）」理論研究の系譜の中に組み入れられ、その先覚者の一人として数えられることになるのではなからうか。

## 〔B〕 引用文献

- 1 Jean - Jacques Rousseau : Œuvres complètes Tome II “La Nouvelle Héloïse”（以下、O.C.,t. IIのように記す）Gallimard,1964、ルソー著安士正夫訳『新エロイーズ』（三）岩波書店1997年
- 2 O.C.,t. III “Discours sur L’ origine et les fondements de L’inegalité”ルソー著 本田喜代治 平岡昇訳『人間不平等起原論』岩波書店1991年
- 3 O.C.,t. III “Du Contrat Sociale”ルソー著桑原武夫・前川貞次郎訳『社会契約論』岩波書店1998
- 4 O.C.,t. III “Discours sur L’économie politique”ルソー著河野健二訳『政治経済論』岩波書店1998年
- 5 O.C.,t. III “Projet de Constitution Pour la Corse”・ルソー著遅塚忠躬訳「コルシカ憲法草案」『ルソー全集』第5巻白水社1989年
- 6 O.C.,t. II, “La Nouvelle Héloïse”ルソー著松本勤訳『新エロイーズ』（四）岩波書店1990年
- 7 羽鳥卓也「ルソー経済理論の構成」内田義彦編『古典経済学研究』上巻未来社1957年（〔A〕の1のAと同じ）
- 8 松本勤『ルソー 自然の思寵に恵まれなかった人』新曜社1995年
- 9 飯岡秀夫著『ルソーの「文明論」—「再生」の行方』高文堂出版社平成14年（2002年（〔A〕の1のオと同じ）
- 10 J.ドウフルニ J.L.モンソン共著富沢賢治（解題）内山哲朗 佐藤誠 石塚秀夫 中川雄一郎 長岡 顕 菅野正純 柳沢敏勝 桐生尚武訳『社会的経済 近未来の社会経済システム』日本経済評論社1995年、449ページ以下の引用箇所は「解題」（富沢）から。
- 11 富沢賢治 川口清史編『非営利・協同セクターの理論と現実—参加型社会システムを求めて』日本

(25) 同上

(26) 「社会的経済」論におけるNPO、NGO、協同組合、共済組織の概念整理は、例えば下記参照  
富沢賢治『社会的経済セクターの分析—民間非営利組織の理論と実践』岩波書店1999年35頁以下

(27) 「社会的経済成熟社会」のイメージを放送との関連で述べた論文に、筆者による次の試論がある。

荒井宏祐「社会的経済（エコノミシアル）と「放送」との関連に関する考察の試み—放送のポスト新自由主義段階を探るために—」

国際公共経済学会編『国際公共経済研究』No6 1995年10月9頁～23頁

経済評論社1997年

- 12 O.C.t.I “Les Rêveries du Promeneur Solitaire” ルソー著今野一雄訳『孤独な散歩者の夢想』岩波書店  
1994年
- 13 J.T. Brumfitt: *The French Enlightenment*, London, Macmillan, 1972, T.H.ブラムフット著、清水幾太郎  
訳『フランス啓蒙思想入門』《新装版》白水社2004年
- 14 Alfred Marshall : *Principles of Economics. An introductory* Volume eight ed, 1920, Ch VI Macmillan  
Reprinted 1986
- 15 荒井宏祐『テレビメディアの経済学—コスト・ベネフィット分析を中心に』創樹社1995年